生涯学習情報誌
フォンズ
No. 73
2014年12月10日
発行

常陸太田市フォンズ・ネットワーク
事務局 常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061
茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL：0294(72)8888
FAX：0294(72)8880

大森町東沢の「不動の滝」

水の想い出 ⑦1

私の生まれ育った世矢地区に余り知られていない滝があります。太田方面から亀作石名坂線を石名坂に向かって車を走らせ、大森町に入り高速道路を過ぎてさらに行くと山側に東沢という沢があります。

その山を風神山に向かって登って行く途中の沢沿いには、地元の人が金鉱跡と呼んだ洞穴や、霊府様（れいしさま）と呼ばれた祠（ほこら）がありました。どちらも３年前の東日本大震災で、昔の面影は失われてしまいました。

洞穴を横に見ながら更に沢の流れに沿って登って行くと、高さ約８㍍くらいの写真のような素敵な滝に出合えます。大雨が降ると、風神山から濁流が流れ落ち荒々しい滝となりますが、いつもはサラサラと水が流れ落ち、漆黒の石肌がキラキラと光り、穏やかな光の世界となっています。

滝下で眺めておりますと心のやすらぎをおぼえます。　（髙橋　靖浩）

フォンズとは、ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。

常陸太田の手仕事

ー伝統を伝える人々ー

常陸太田の伝統的な工芸品として名の知られていた、河合のホウキ、真弓馬、大わらじ。手作りで大事に作り続けられてきた工芸品の数々を伝統を絶やさないよう守り続けているグループの活動とともに紹介いたします。　（武藤　卓、塩原　慶子）

その1 河合のホウキ

一 河合ホウキの継承者は現在たった1軒となってしまいました。在来農産物の普及継承活動をしている「種継人の会」では、ホウキ草栽培農家の農業支援をしています。今年度初めて一粒の種が、1本のホウキとなるまでの過程をお手伝いしたそうです。久慈川の川沿いにある河合地区では、昭和期にホウキ草の栽培が始められました。当時は数十軒あったという栽培農家は、現在たった1軒。横山有寿さん・宮子さんご夫妻が今も手入れしている畑は、雑草の1本も生えていない見事な畑です。ホウキ草の種には「赤」や「黒」と呼ばれた種類があったそうですが、現在河合地区に伝わっている種は「黒」のみ。ホウキ草の種をまき、収穫時に翌年の栽培用に種を取ります。その種は、翌年ならば発芽もよいそうですが、まかずに保管し、年を1年重ねると発芽率が極端に落ちてしまいます。作り続けられないと、種そのものが途絶えてしまうのです。

二 綺麗に整地された畑での種まきですが、ほんの少しの段差でもよろけて農作業初心者ではなかなかまっすぐにはまけません。種まきは6月中旬から下旬。梅雨の雨を活かして発芽を促します。天気風土すべて計算されて育てられる作物は、常陸太田の風土そのものの恵みです。

三 種まきから10日あまり、生えそろったホウキ草の芽を間引きします。間引きの間隔によって、収穫時の茎の太さが変わり、株の間隔が大きければ根を張れるため太めの草になり、間隔が狭いと細めに成長します。ホウキに仕上げる時には、太い茎も、細めの茎も、それぞれの用途で必要となるため、ただ草を抜けばいいという単純な作業ではありません。

四 8月下旬の畑の様子です。約2カ月で収穫できるホウキ草は、作物の優等生かも知れません。刈り取りは、穂の花が咲き色づく前に行います。穂先から2節目を持ち、止め葉を引きはがすようにして折り取ります。刈り取りは、昔は子ども達も総出で行われ、特徴ある手さばきを記憶にとどめている方も多いようです。

五 刈り取られ、束ねられた穂先は、選別・脱穀・煮出しの流れ作業で整えられて行きます。「ホウキ草は捨てる部分が全くない」と横山さん。刈り取り時に茎が折れ、穂先だけになってしまっても、小さなホウキとして利用したり、茎の部分は芯として利用したりします。葉の部分も、穂を束ねる紐代わりとして、すべて利用していました。選別された同じ太さの茎を20本ほどにまとめ、穂先近くを藁やホウキ草の葉で束ねます。穂先を脱穀するのと同時にその束ねた藁なども取り除いてしまいます。ビニール紐で束ねたのでは、この作業がスムーズに行きません。大地からの恵みは、ほんの少しでも捨てることなく活かす、先人の知恵に頭が下がります。

六 昔の農作業では、みなで集まっておしゃべりしながらの作業も多く見られました。隣近所の人たちと笑い話をしながら、炎天下の作業を少しでも和らげようとの心配りでしょうか。笑い声とともに作業ははかどっていきます。

七 脱穀した穂先を大きな羽釜で煮出します。穂先に残った種が、庭先などに落ちて芽がでることもあるそうで、残った種を煮てしまう意味合いと、穂先を強くするためだそうです。青々としていた穂が、一瞬でうっすらと白い緑色に変化しますが、どちらも美しい自然の創り出す色です。

煮だし前

煮だし後

八 河合地区の夏の終わりに必ず目にしたのが、この道ばたに干されているホウキ草の穂の風景でした。煮出した穂先を、天日で数日間乾燥させ、稲刈りなどの終わった農閑期に行うホウキ編みまで保管します。この乾燥がうまくいかないと、穂がかびてしまったりして品質が左右されるため、昔は干し場を探して、遠くの川沿いの空き地まで運んだこともあったとか。地域の方は、大事なホウキ草をタイヤで踏まないようにちゃんとよけて通ってくれていたそうです。今でもこの天日干しの風景は、河合地区の夏の風物詩となっています。

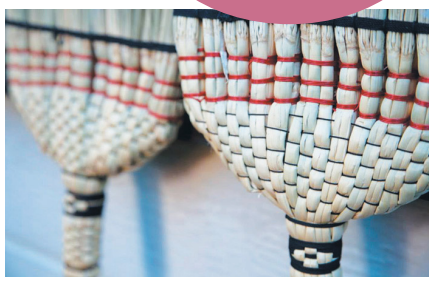
九 秋の声を聞くようになると、ホウキ編みが始まります。今ではたった一人になってしまった横山さん。50年以上の長きにわたってホウキ作りをしてきた、その手の動きはダイナミック！まるでホウキが生きて動いているかのようです。見る間にホウキができあがっていきます。右下の写真は20年以上前に作られた物、左下は昨年作ったホウキです。色こそ違っていますが、しっかり作られているため、今でも全く問題なく使用することができます。柄に続く部分の編み方が数種類あり、それぞれ名前がつけられています。

十 有寿さんがホウキを編み上げると、今度は宮子さんの飾り糸をつける作業になります。この飾り糸の種類や色は、50数軒あったホウキ農家がそれぞれにオリジナルの編み方で工夫をしていました。編み方を見るだけで、どこの家で作ったものかが判ったのだそうです。できあがったホウキは、遠く郡山方面まで、宮子さんご自身で行商に出かけていました。年末の風物詩としてホウキを背負って売り歩く姿を覚えている方も多いと思います。

ミニほうき作りワークショップ開催

12月20日(土) 13:30～

去年に引き続き、今年もミニほうき作りのワークショップを開催します。作業所付近は駐車スペースに限りがあるため、集合場所から車に乗り合わせて会場に向かいます。作業所へ車で直接乗り付けるのはご遠慮ください。



期　　日：12月20日（土）午後1時30分～
集合場所：市役所南側駐車場
募集人数：若干名
参 加 費：1,500円
会　　場：横山さん宅作業所
申込・問い合わせ：種継人の会　布施 090-6135-4092

その2 真弓馬（こま）

真弓馬は、常陸太田市の世矢地区に伝わる素朴な玩具です。もともとは、源義家が奥州征伐の際、戦勝を祈願して真弓神社に神馬（しんめ）と弓を奉納したのが始まりとされています（太田盛衰記より）。

その後、生きた馬ではなく、馬の絵や馬の形を作って奉納するようになりました。徳川光圀の時代には、真弓町や亀作町の農家が農閑期の副業として境内で売ったそうです。

ヒノキ材やスギ材の板をやっこダコのような形に切って台にはめ込み、彩色し馬に見立て、下に4個の車をつけます。手綱を引っ張ると動く、素朴な玩具になります。限定販売ですが、現在も齋藤宮司さん宅で購入することができます。

（高橋　靖浩）

▲真弓馬を授与している真弓神社の宮司、齋藤学さん

◀「真弓山」と焼印された真弓馬

毎年世矢小学校5年生が真弓馬作成に挑戦しています。

真弓神社の歴史

真弓神社

御祭神　大巳貴命（おおなむちのみこと）
少彦名命（すくなひこなのみこと）

真弓神社は大同二年（八〇七）の創立（社伝）、坂上田村麿、大伴乙麿が北征の日に八所権現を斎祀、堀河天皇在位中の寛治年中（一〇八七～一〇九四）に、源義家がこの神に祈願し、陸奥を平定して凱旋のおり、弓八張を奉納したことから、真弓八所権現と呼ぶようになった。

以来、武門の神として崇敬をあつめ、佐竹氏が社殿を造営、また水戸藩主徳川光圀は山王大権現の称号を奉り、真弓山が水戸城の鬼門にあたるので、神徳を崇敬して二十余村の大鎮守とし、春季大祭礼には御連枝（分家）の殿様を代参させたといわれている。

明治元年十二月に社号を真弓神社と改め、農業、漁業関係者に厚い崇敬層をもっている。

真弓神社と狛猿（なんとも素敵な顔をしております）

その3 大仏様の大わらじ

鎌倉の大仏様として親しまれている神奈川県鎌倉市の高徳院の右脇の休憩場に架かっている「大わらじ」をご存知でしょうか？これは金砂郷地区の松栄町の子ども会を中心に地域全体で協力して作った「大わらじ」なのです。３年に一度作製し、奉納しています。

昭和26年に開催された旧郡戸村産業祭で、地域の子どもたちが出品した大わらじが思いのほか好評を呼び、「戦後復興間もない日本中が幸せになるよう、大仏様にわらじを履いて行脚してもらおう」と、高徳院に奉納したのがきっかけだそうで、同31年から３年に一度架け替えをしています。

わらじづくりの指導者、松栄町会長・安 一麿さんは「幼い頃、祖父から教わり大わらじを作った。今ではその技を後世・子どもに伝えています。子どもにとって鎌倉の大仏様への奉納は一生の思い出になるでしょう」と語ってくれました。

朝９時から夕方の６時過ぎまで時間をかけ、幅約１ｍ、長さ約1.8ｍの両足分を完成させました。大わらじができあがったあとは、子どもも大人も満足そうに帰っていき、奉納に鎌倉に行く日をとても楽しみにしている様子でした。

（白石　百合乃）

原点回起 8

「夢」

高校生の時、将来の夢として「映画監督になりたい」と作文を書いたことはこのコラムでも書いた通りです。一時は、毎週水戸にでかけ朝から暗くなるまで映画館に居続け＆見続けていたものでした。その夢は忘れたことはなかったのですが、大学で油絵に専念していた間はきっかけもなく、その思いは心の奥底にしまったままでした。昨年、種継人の会に参加し、横山さんがホウキを作る姿を写真撮影していて、ふと、写真だけではなく音やその場のざわめきなども映像で撮って見たいと思うようになりました。日常の風景や、人々の暮らしをそのまま後世に残しておきたいと思ったからです。写真も、記録するだけではなく、その場の空気感まで閉じ込めたような写真を撮ることはできますが、映像ならばさらに音や声までも含めて、全体感を伝えられるかもしれない…。ホウキの種まきから、刈り取り・選別・脱穀・煮出しと今までの全行程を映像に収め、ドキュメンタリーのようにまとめたいと思っています。来年の２月頃には、種継人の会のイベントなどにおいて、映像を発表したいと今編集中です。長い間心の奥にあった夢が、またひとつ叶いそうです。

フォンズに関わらせていただいた２年弱の間に、人のつながりからいろいろ貴重な経験をさせていただき、このコラムも書かせていただきました。文章を書くことは苦手でしたので、ある意味挑戦でもありましたが、自分はやはり、映像や写真で伝えて行きたいと改めて考えるようになりました。そうです「原点回帰」、写真でこれからも常陸太田の魅力を発信していきたいと思います。短い期間でしたがお読みいただきありがとうございました。

（武藤　卓）

リレーエッセイ「思い出の絵本」　『あらしのよるに』　～71～

（下大門町　田所　一希）

学校の休み時間といえばいつも外で遊んで、図書カードはいつも真っ白だった小学４年生の頃、担任の先生が教えてくれた本が「あらしのよるに」でした。この物語は嵐の日に暗闇の小屋の中で、ヤギのメイとおおかみのガブが出会い、お互いの正体を知らないまま友情を育んでいくというものです。「もしヤギの正体がバレたら…」と思いドキドキしながら２人の会話を読んだ記憶があります。

子どもながらにこの絵本から学べる教訓がたくさんあったように思えます。それは、友情を築くのに、相手の立場や年齢、外見は全く関係がないということです。相手がどんな人でも、その人を受け入れられるかどうかは「自分が歩みより、その人を知ろうと努力すること」が大切なことだと気づかせてくれたような気がします。嵐がやむとメイとガブは、結局お互いの正体を知らないまま、それぞれの家へ帰っていきます。でも２人の間には、強い絆ができていました。大人になった私にも、ガブやメイのように、さまざまな違いをこえて友情を持つことができています。

今でも雨が降ると心の中で２匹が出会う所を想像するとクスッと笑ってしまう、そんな私の思い出の絵本です。

ほっとひといき　キクタニギク・菊渓菊（キク科）

やや大型の野生のキクで、日当たりのよい土手や道端に生育しています。名前は京都東山の“菊渓の菊”という意味です。黄金色の花が泡のように集まっているのでアワコガネギク（泡黄金菊）とも呼ばれます。花期は10月～11月で、花や葉はよい香りがします。切れ込んだ葉や花の様子から栽培の菊に見間違うこともあるようです。市内各地で見られましたが、最近は生育地が減少しています。その原因の一つは土手斜面の草刈りなどが行われず、生育環境が悪化していることにあります。そのため茨城県ではこの種類を絶滅危惧植物（レッドリスト）に指定しています。さらに環境省のレッドリストにもあげられています。

その他、野生の菊にはノコンギク、ユウガギク、カントウヨメナ、リュウノウギクなどが見られますが、いずれも白色の花を咲かせます。　（安嶋　隆）

ちょっとひといき「大内園芸」

内田町で36年続く「大内園芸」は「オオウチレッド」など様々な品種を育成してきたシクラメン農家として有名です。これから年内はシクラメンがピークを迎え、４月下旬から５月中旬は、クレマチスや母の日のカーネーションなども販売予定。２代目の若園主、広明さんが情熱を持って育てています。2014年茨城県フラワーパークで行われたシクラメン品評会で金賞を受賞なさったばかりです。

（萩谷　幸司）

●常陸太田市内田町3232-3
●74-3062
●http://ouchi-red.jp/index.html

常陸太田の地名話　～17～

金井（かないい）　【常陸太田市金井町】

太田七坂の一つである板谷坂の下は金井下という。そこには太田七井の一つ「金が井」がある。この井戸は水量が豊富であったことから、かつては市内の醸造元が清酒醸造にこの清水を利用していた。また最近まで、お茶や生活用水などに近隣住民が利用していたという。町名の「金井」は、この辺りに鍛冶屋や鋳物師が住んでいたことに由来する地名といわれ、慶長の頃には数軒の鋳物師がおり、明治初めには７軒の鋳物業者があったことが記されている。

水戸９代藩主徳川斉昭の湊反射炉鋳造にも、当地の鋳物師が参画している。ここで考案された「太田風鈴」は夕顔棚に独特の風情をかもしだしたが、今はその名を知る人も少ない。　（川松　博）

＜参考文献＞「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」「常陸太田市史 通史編」

太田七井の一つ金が井

新太田点描 9

柳下園・小澤多仲

小澤多仲、彼は宝暦二年(一七五二)に太田町の郷士の系を持つ家に生まれた。諱を含章、字を公平と云い、柳下園、山東、菜摘等と号し、通称名を多仲と云った。

多仲は、水戸彰考館総裁の立原翠軒に詩や文章を、書を江戸の書家沢田東江に学んでいる。また家にあっては塾「鳳塾」を経営し、太田町や近在近郷の子弟たちに勉学を教授し、同郷の好学の仲間とも親交を深めていた。

そのなかで、天明七年(一七八七)八月十六日夜、観月会と称して学問・芸術に励む同好の人たちを自宅に招待している。この夜、名月を賞して詩の会が催され「明月帖」と題した詩集が作られた。

ここに詩を寄せたものは主催者の小澤多仲をはじめ天下野村の木村謙次(北方探検家)、太田町の高野世龍(医師、郡奉行)、上河合村の西天(枕石寺僧)、磯部村の田辺政有(神官)等十九名で二十九詩を収めている。嘸かし楽しい一時を過ごしたことであろう。

この後、多仲は水戸に居を移してさらに学問研鑽に励み、寛政三年(一七九一)には彰考館の編員に採用されている。特に漢詩・文を得手としながらも俳諧を嗜み博物学にも興味を示していた。寛政九年(一七九七)七月死去。享年四十四歳。墓は酒門の共同墓地にあり墓碑の撰文は立原翠軒である。

ところで、多仲の妻道女は麻生町の羽生家から嫁いで来たが、寛政三年六月に死去している。享年三十三歳。墓碑は木村謙次の撰文で太田の法然寺にある。序でながら前に(№6)紹介した画師・宇佐美太奇は天保四年(一八三三)十二月に霞ヶ浦の真景図を描くために麻生町の明神山へ登っているが、その時の道案内同行者が亡道女の実家の羽生翁である。この道すがら太奇と翁はどんな話をしたのであろうか。

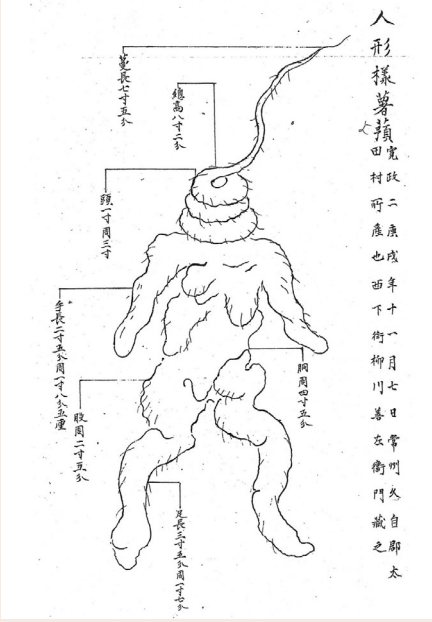
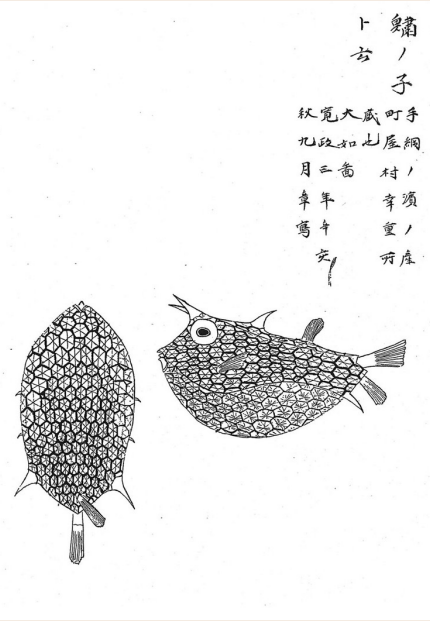
これより先、寛政二年(一七九〇)十一月七日、多仲は大田村で掘り取ったという人形の様な自然薯を、西下街の柳川善左衛門が持っているということを聞き付け、そこで早急に駆けつけて、姿形の寸法を測りながら詳細に観察し、これを自著「鵡膩霧茹雲」に描き留めている。(左に掲載)

この本は表紙共で三十八ページの稿本で、寛政八年(一七九六)六月の「小澤含章珍蔵」と奥書きがあり、現在は東京大学図書館所蔵となっている。

内容をザッと見ると、今で云う突然変異による変・奇形種の動・植物等を二十五種ほど詳細な絵を描き解説を加えている。これは博物学に強い関心と興味を持っていた多仲が、水戸領内外で話題になったり噂が飛んだりした珍奇な物を是非見てみたいと情報把握に勤しんだ由縁であろう。

そのなかでも特に魚種には関心が強かったとみえ十四種の珍魚を載せている。一例をあげると、「鱐ノ子ト云」として「手綱ノ濱ノ産　町屋村幸重所蔵也　大如圖　寛政三年辛亥秋九月韋寫」として鱗の形まで緻密に描いている。(左に掲載)

なお多仲の編著書としては左の五点が確認されている。

一、明月帖(天明七年)茨城県立図書館所蔵
一、万歳鯛考(寛政二年)国立国会図書館所蔵
一、拓本「正陽門帖」(寛政五年)書壇院所蔵
一、鵡膩霧茹雲(寛政八年)東京大学図書館所蔵
一、文園生(年不詳)国立国会図書館所蔵

(吉成英文)